

Title	浙江大学蔵戦国楚簡の真偽問題
Author(s)	福田,哲之
Citation	中国研究集刊. 2012, 55, p. 54-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58688
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 浙江大学蔵戦国楚簡の真偽問題

### 福田哲之

## 一、浙江大学蔵戦国楚簡の概要

浙江大学蔵戦国楚簡(以下、浙大楚簡と略記)は二○○九年に浙江大学芸術与考古博物館に収蔵され、二○一一年十二月に浙江大学蔵戦国楚簡』が刊行された。やや長文炎編著『浙江大学蔵戦国楚簡』が刊行された。やや長文にわたるが、はじめに曹氏による同書の「前言」にもといわたるが、はじめに曹氏による同書の「前言」にもとが編著である。

館に収蔵された。竹簡の整理作業とともに、竹簡のた金蘭基金の寄贈を受け、浙江大学芸術与考古博物浙大楚簡は二〇〇九年夏に校友朱国英氏が設立し

飾が示す時代特徴とも符合する。 の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の年代はおよそ紀元の測定結果を総合すると、竹簡の本法機力とも符合する。

え、 らの楚簡が偽物ではないことが証明された。 分析結果を岳麓書院蔵簡検測の資料と参照し、これ に委託し竹簡の降解検測および墨跡分析を行ない、 楚簡と一致した。二〇一一年三月に浙江大学材料系 あった。一方、浙大楚簡の墨跡の顕微鏡写真は上博 電子顕微鏡写真の組織構造はまったく異なるもので 同時に摸造された漢簡の残片と比較した結果、

点数は三二四点、綴合復原の結果、もとの完全な簡 篋中にあったが、もともとすべてが篋中にあったも はおよそ百六十枚前後と推測される。 のか否かは知られない。整理完了時点における竹簡 これらの竹簡は浙江大学に入蔵された時に彩絵漆

を呈しており、きわめて特殊で初見に属する。 跡は明瞭ではない。 文字の位置によれば二編と見なされるが、編縄の痕 する。竹簡の頭・端は平斉、契口はなく書写された む)は二十三センチ前後、 よそ三十センチで、 竹簡の長さは、大部分の完簡(綴合後のものを含 簡の上端は平斉、 別の三本の『日書』の簡長はお ほぼ戦国尺の一尺と合致 下端は尖弧状

筮祭禱・遣策の四種に分類される。 整理の結果、 浙大楚簡の内容は、 古書・日書・ト

> があり、字数は三千一百以上にのぼる。 別に十三点の重複する内容 簡一二四点 (写真のみ残存する二点の残簡を含む)、 『春秋左氏伝』襄公九年から襄公十年 (あるいは別本) (未完)、竹 の残簡

(11) 日書

書写され、内容から『玉勺』と『四日至』との二篇 に分けられる。 三簡からなり、各簡の文字は正背両面に連続して

斗柄が指す天象位置を記載する。 号簡の内容は専ら楚国の「冬柰」月について日々の が指す天象位置、いわゆる北斗の行を記載する。一 勺」と題され、内容は十二支を序とし、 『玉勺』篇は二簡からなり、 一号簡の簡首に 日々の斗柄 玉

され、 供した、古代のいわゆる「占候」である。 れる異なった物候を記しており、占卜の時の参照に 『四日至』は一簡のみで、簡首に「四日至」と題 内容は「日至」時の干支日の違い によって現

合後二十点。内容は墓主の生前の卜筮祭禱の記録で 本の完整簡以外、 卜筮祭禱

他の竹簡はすべて断簡で、綴

ある。

遣策

合後三十三点。内容は随葬物品の目録である。 本の完整簡以外、 他の竹簡はすべて断簡で、 綴

# 邢文「浙大蔵簡辨偽」と真偽論争

たのが、邢文氏の「浙大蔵簡辨偽(上・下)」(以下) 日報』二〇一二年六月一日第十五版「国学」に掲載され 態度をとっていることを端的に示すものと理解された。 に公表以前から筆者も耳にしており、こうした状況は中 ほとんどの研究者が沈黙したままという異例の状態が続 浙大楚簡に関してはそうした現象はまったく見られず、 札記類が掲載されるのが常であった。ところが、今回の ターネットに文字の釈読や残簡の綴合にかかわる多くの 学出土文献与古文字研究中心などの出土文献関係のイン 後から連日にわたって、武漢大学簡帛研究中心や復旦大 国側研究者の多くが、浙大楚簡に対してきわめて慎重な いた。もっとも、浙大楚簡が偽簡らしいとの噂は、すで 二〇一二年五月二十八日第十五版「国学」および『光明 辨偽」と略記)であった。その構成は次の通りである。 そうした中、いわば沈黙を破るかたちで『光明日報 これまで新出土文献の報告書が公表されれば、その直

> 浙大蔵簡辨偽 上 -楚簡《左伝》」

(導言)

浙大蔵簡及其意義

二、楚簡《左伝》

(一) 形制

1、竹簡没有契口 編縄

2 竹簡長短不一。

3

竹簡寬窄不一。

章末或節末的竹簡多為短簡

(二) 内容

1、故意妄改。

(2) 星名

(1) 人名

2 将錯就錯。

(3) 拠現代人思路、

望文生義的妄改

 $\equiv$ 鑑定 3 卦画

(56)

浙大蔵簡辨偽 (下) 戦国書法\_

#### 上篇 回

三、戦国書法辨偽

(一) 章法

2 1、断簡拚接後字距過大。 簡首残而字不残。

3 簡辺残却仍見応該残去的標点符号。 簡尾残而字不残。

(二) 結字

4

2 1 上下:下不承上、 中宮: 不明主筆、 失守中宮。 上不覆下。

3 左右 拚凑 :左亏右欠、 偏旁拚凑 錯字連篇 不守正法

5 簡体: 拠簡体字、 拚凑古字。

6

失真:草写失度、

字形失真

1 釘頭 • 牛頭。

尖頭 墜尾 拖尾。 鼠尾。

蜂腰

・鶴膝の

悪影響を厳しく糾弾し、稿を結んでいる。 そして「四、結束語」では、整理者の資料整理にかかわ る成果と貢献を評価しながらも、 の面からも到底真簡とは見なしがたいことを指摘する。 字・筆法の三点にわたって詳細な分析を加え、戦国書法 下篇「三、戦国書法辨偽」では、書法を中心に章法・結 の三方向から問題点を挙げて偽簡たる証拠を示し、続く **楚簡《左伝》辨偽」では、竹簡の形制、内容および鑑定** 浙大楚簡の鑑定結果と学術的意義を確認した上で、「二、 『浙江大学蔵戦国楚簡』の「序」および「前言」が記す 邢氏はまず上篇「一、浙大蔵簡及其意義」に 偽簡が社会におよぼす

大楚簡毋庸置疑 (以下、「毋庸置疑」と略記)が同じく『光明日報』二〇 その後、この邢氏の批判に対する曹錦炎氏の反論「浙 —从文本角度論浙大楚簡的真実性

顧

結束語

四、

6 5 鋸歯 折木・ 散鋒。 柴担。

7 游絲 病筆薈萃。

お 7

は『光明日報』紙上を舞台とした論争に発展してきたの「国学」に掲載された。このように浙大楚簡の真偽問題記)が『光明日報』二〇一二年六月二十五日第十五版原的関聯性与浙大偽簡再批判」(以下、「再辨偽」と略原 の関聯性与浙大偽簡再批判」が、以下、「再辨偽」と略の関聯性与浙大の再批判「浙大蔵簡再辨偽——文本復一二年六月十八日第十五版「国学」に掲載され、さらに

である。

立の大半が個別の本文の検討に費やされている。
 で、その副題にも示されるとおり、専ら「文本角度」すず、その副題にも示されるとおり、専ら「文本角度」すず、その副題にも示されるとおり、専ら「文本角度」すが、その副題にも示されるとおり、専ら「文本角度」すが、その副題にも示されるとおり、専ら「文本角度」すが、その副題にも示されるとおり、専ら「文本角度」すが、その副題にも示されるとおり、事に対するのは、那氏が提起した中心的な論点である形制や書法の問題がある。

材にどのように書写されているかといった、ハード面へ題の検討においては、まず第一にその本文がいかなる素つながらないという点である。むしろ浙大楚簡の真偽問陥る危険性があり、しかもいくら本文の古態性を指摘しされる面が大きいため、議論のかみ合わない水掛け論にここで留意すべきは、本文の問題は論者の解釈に左右

対

て曹錦炎氏は

「毋庸置疑」の中で、

本文の問題に論点を移すことは、いたずらに議論の混乱に検証されるべき問題であり、それを棚上げにしたまま「辨偽」において指摘した形制や章法など論点は、慎重の着目が重要であると考えられる。その意味で邢氏が

足を試みてみたい。要と思われる論点を中心に検証を加え、併せて若干の補要と思われる論点を中心に検証を加え、併せて若干の補以下ではこうした意図から、「辨偽」の中でとくに重

を招く結果となろう。

### 三、簡長にかかわる疑点

₩ 長短の差異が見られることを指摘し、 および簡10にはそれぞれ前後の簡との間におよそ一㎝ を取り上げる。 いて指摘した四つの論点の中から「2、竹簡長短不一」 !の形制と合致しないことを明らかにしている。これに 那氏は 本章では邢文氏が「辨偽 これらはいずれも完簡であるにもかか 『左伝』の簡8~簡70および簡106 (上)」の「(二) 正常な戦国期の わらず、 ( 形制」にお 簡 110 を例示 簡 70 簡 0

跡等情況、凡是讀過考古報告或見過考古發掘品的讀至於《邢文》所謂竹簡尺寸不一、無契口・無編繩痕

者、都能找到出處。

できると反論する。 状況は、すべて考古報告や考古発掘品に見いだすことがと述べ、竹簡尺寸不一および無契口・無編繩痕跡などの

に、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本まず簡51から見ていく。はじめに本文を確認するための簡51と簡5の二例を取り上げてみよう(以下とくに断の簡51と簡5の二例を取り上げてみよう(以下とくに断の簡51と簡5の二例を取り上げてみよう(以下とくに断の節51と簡5の二例を取り上げてみよう(以下とくに断の節51と簡5から見ていく。はじめに本文を確認するためまず簡51から見ていく。はじめに本文を確認するためまず簡51から見ていく。はじめに本文を確認するためまず簡51から見ていく。はじめに本文を確認するために、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、簡50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、第50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、第50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、第50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、第50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、第50・簡51・簡52の釈文および対応する通行本の本に、第50・簡51・簡52の釈文を表示している。

[釈文]

文を引用する(注一)。

公子騑'・公子發'・公子嘉'・公孫輒'・公孫蠆・鄭箙(服)也。腘(將)明(盟)、鄭六【簡5】卿、乃許鄭成。」【簡50】十一月"己亥、同盟於戱(戲)、

簡 52

……乃許鄭成。十一月己亥、[通行本]

同盟于戲、

鄭服也。

將

盟、鄭六卿、公子騑・公子發・公子嘉・公孫輒・公

孫蠆・……

事の末尾四字「乃許鄭成」が書写され、その後に章段の 況を見ると、簡50には襄公九年十月の「諸侯伐鄭」 目までが書写されている 末尾を示す符号(墨鉤) 脈の面からも本文の缺失は想定し難い。 「十一月己亥」の記事に移り、簡52には鄭の六卿の五 簡 50 簡 51 ・ 簡52の本文は通行本と対応しており、 がある。そして次の簡 1 (注2) 0 一方、竹簡の状 51 から の記 文 人

50・簡51・簡52の数値を示すと以下の通りである(注3)。参考までに原寸に近いと思われる同書の図版によって簡データが示されておらず具体的な数値は不明であるが、『浙江大学蔵戦国楚簡』には『左伝』の各簡の簡長の

簡50 七·五m、短簡

簡51 一九・六㎝ (一七・三㎝ + 二・三㎝)、短簡

(綴合)

簡 52

三三・四㎝、

り、 鉤 が二七・一㎝となり完簡の簡長を四㎝近く超過するた 曹氏の 仮に簡50の後に簡51が接続していたとすると、 この想定は の後は空白になっていた形跡がうかがわれ、 「前言」によれば完簡 成り立たない。 0 簡 50 簡長は二三m を見ると符号 前後 同様の であ

上里、三季 चि 副 作

置

世野野

新介

死心少務心少為心必動,心为知

図2 簡58·簡59·簡60·簡61

八十 粉交學手 世 斜 舟 黎历女告白自 的爱女

彦をを見け

盛 弊性ある

華老分別看 日的三女 花野音 再對 舒 约意 8 当香幹到 寒を羞欠白己

首題山科

(60)

始されていたことがあらためて確認される。51は現存簡に見られるとおり、「十一月"己亥」から開写されていなかったとみてよいであろう。したがって簡許鄭成」の四字で終わり、符号(墨鉤)の後に文字は書状況は簡38にも認められることから、簡50の本文は「乃

三㎝前後の差異を生じてしまうのである。 にもかかわらず、簡51の簡長が完簡に対しておよそ四㎝短い点である。簡51末尾は「六」字の最後の部分が少し短い点である。簡51末尾は「六」字の最後の部分が少し短い点である。簡51末尾は「六」字の最後の部分が少しった。

ら簡61までの釈文を通行本と併せて引用する。同様の現象は、簡59にも認められる。はじめに簡

58 か

[釈文]

(隘)、無所氐(底)告。自含(今)日既盟之【簡[享] 亓(其)土利、夫帚(婦)辛苦執(墊)嗌

昭 逡 (後)、 可己 (以) 亦如是。【簡60】 |之| 大神要言與 鄭國而不唯又(有) (庇) 荀偃曰、改載書。公孫舍之 (焉)。 民者是從 若 簡 61 (從)、 簡 59】禮與弝 而敢有異

……享其土利、夫婦辛苦墊隘、無所厎告。通行本]

自今日既

有異志者、亦如之。荀偃曰、改載書。公孫舍之曰、盟之後、鄭國而不唯有禮與彊可以庇民者是從、而敢

昭大神要言焉。若……

に復原した整簡であり、 応しており、 に復原した整簡となっている。 さの短簡、 ら簡58までの六簡はいずれも残簡を綴合して完簡 の本文は、先に引用した簡5以降も基本的に通行本と対 た簡52から簡61までの簡長を記しておこう。 ここでは便宜上、簡5から簡61までを挙げたが、 一方、竹簡の状況を見ると、簡52 続く簡60・簡61は残簡を綴合して完簡 釈文にも大きな缺脱は想定されてい 次の簡5は完簡の半分以 参考までに図版から計測 の完簡の後、 簡 53 0 下 の )状態 )状態 · の 長 竹簡 か

簡52 二三・三㎝、整簡(綴合)

簡57 二三・四㎝、整簡(綴合)

一○・三㎝、整簡(綴合)

四 cm

整簡

(綴合

二三・三㎝、整簡 (完簡)

(61)

あるが、 れ、これを基準としてその前の簡60についても復原の妥 ため、もともと完簡であったことが物理的に裏付けら て簡53から簡5までの六簡の復原の妥当性が確認され :52は途中に断裂のない完簡であり、これを基準とし 簡61は断裂箇所が「之」字の上にかかっている 簡60・簡61はどちらも残簡を綴合した整簡で

されるため、その間の簡59は前後のどちらの簡とも綴合 取り残されてしまう点である 関係を結ぶことができず、簡長が半分以下の短簡のまま 続し、しかも簡58および簡60がいずれも完簡として復原 ここで問題となるのは、簡58・ 簡59・簡60の本文が連 当性が確認される [図2]。

が、冊書としてどのように編綴されていたのか困惑せざ あったのか、という別の問題に逢着することになる。 長短まちまちの竹簡に連続して本文を書写する必要が はないかと推測したとしても、それではなぜ編綴しない づけて、そもそも『左伝』は編綴されていなかったので るを得ないが、仮に契口や編繩痕が見えないことと関連 ない短簡の例が散見される。これらの長さの異なる竹簡 らず前後の竹簡との綴合を想定し難い、いわば行き場の また、これらの短簡ももとは二三㎝前後の簡長をも "左伝』にはこのような、本文は連続するにもかかわ

> うな形跡は認められない。 浙大楚簡自体にも、文章途中の空白の存在を裏付けるよ いて、合理的な説明を与えることが困難である。 ぜそのような不自然な位置に空白が必要であったかにつ 本文の後は空白になっていたと仮定した場合も、 さらに

これまでに公表された出土簡牘には見られない不可解な 現象が認められるのである。 このように簡長のみの問題に限っても、 浙大楚簡

### 四 章法にかかわる疑点

が、「辨偽(下)」の「(一)章法」に掲げられた以下の ·た『左伝』の編号)。 .項目である(丸括弧は邢氏が論文中に具体例として挙 邢文氏の論点の中で簡長の問題とともに注目されるの

1 断簡拚接後字距過大。(簡 68 ・簡 106

げ

簡尾残而字不残。 (簡 72 2

簡首残而字不残。

簡 104

簡

32

3 4 簡返残却仍見応該残去的標点符号。

大楚簡が整治された完簡ではなく、すでに破損した状態 の残簡を用いて書写されたことを示すものであり、 邢氏が指摘するごとく、ここに列挙された諸例は、 前章

的 で取り上げた簡長の問題と同様、 に裏付ける論拠として重要である。 偽簡であることを物理

か

缺字は想定されていない。 自然な空白が存在する。この空白箇所に文字が存在した 上段末部 らに顕著な例として簡10・簡10を取り上げてみよう。 これは完簡を書写した際には決して生じ得ない現象であ という現象が複数存在することを指摘したものである。 において下接簡の第一字の前の字間が不自然に広く空く 痕跡は認 まず 「1、 簡102では下段首部 残簡を個別に書写したことを示唆する。ここではさ められず、『浙江大学蔵戦国楚簡』 (「缶」字の後)<br />
[図4]とそれぞれ断裂部に不 断簡拚接後字距過大」は、 (「晷」字の前) [図3]、簡110 綴合された断簡 の釈文にも では

自然であり、「缶」字の下部はもともと書写されていな な残存状況からみて墨の る墨の剥脱を想定する必要があるが、 ていないことに気付く。もとより竹の繊維のほぐれによ 較すると簡11では下部の れてささくれ立った状態になっている。 旬缶」の「缶」字と簡90の「旬缶」の「缶」字とを比 そこでなぜこのような空白が生じたのかが問題となる 図版によればこの部分は両者ともに竹の繊維 痕跡が全く認 「廿」部分の墨線が全く残存し 上部のかなり明瞭 められ さらに簡 110 ない がほぐ のは不 の

> も簡10の上段・下段および簡11の上段・中段をそれぞれ えれば、 別個に書写したために、 りにくい当該箇所を避けた結果生じたものであり、 :った可能性が高いであろう(ミサイ)。こうした状況を踏 簡 102 · 簡11の二箇所の空白は、 綴合後の不自然さを予知できな 書き手が墨の しか 0

かったと推測される。

は決して起こり得ない配字上の破綻が生じた例である。 書き手の無意識の本能に影響されて、整治された完簡で にある書写面のスペースに文字や符号を収めようとする いずれも断裂の生じた残簡を用いて書写した結果、 4 .様の状況は簡15・簡90にも指摘することができる。 次の「2、簡首残而字不残」「3、 簡返残却仍見応該残去的標点符号」の三項目は、 簡尾残而字不残

同

に注目すると、第一例・第五例と比較して、 半分を缺失する び第四例はその角度が不自然であり、 在する。これらの 五例は完存部に、 とく、ここには「之」字が五例出現し、第一例および第 ĺ 簡15は竹簡のほぼ中央に縦の断裂があり、 ちょうど缺失部に収筆が位置することになったと推 た状態の竹簡に書写したために、 図 5 1 3° 第二例・ 「之」字の右上から左斜め下への 第三例・第四 釈文中に傍点で示したご すでに左半分が缺 矢印で示すごと 例は缺失部に存 第三例およ 中間部は左 筆画

失

[図3] 簡10「成一鄰孟导獻子曰寺/导所胃有力」



簡10放大図版(部分)



[図4]簡10「已桑林旬缶/已矚晏士匄之曰青侯宋/冔之觀豊有之」

句が、

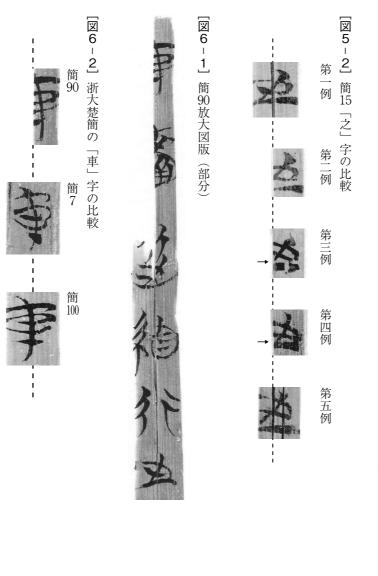


簡110 放大図版

(部分)

簡96「旬缶」放大図版(部分)





測される [図5-2]。

る不自然な現象も、すでに左半分が缺失した竹簡に書写 の破綻が認められる。このように簡90の「車」字に見え についても簡9は縦画との交差が不自然であり、結構上 簡90とは様相を異にする。さらに「車」字の下部の横画 線を描きつつ起筆と収筆とが簡の中心をとらえており、 るように思われるが、簡7の「車」字の縦画は大きく弧 の中央に収まっており、 を復原すると文字の中心が右寄りに位置したことになる かかわらず、 いう齟齬が生じている [図6-1](注5)。この「車」字 したために生じたものと推測される。 次 [図6-2]。例えば簡7は一見すると簡9と近似す 浙大楚簡の他の二例 の簡90では冒頭部分の竹簡の左半分が缺失するにも 冒頭の「車」 簡90のごとき傾向は認められな (簡7・簡10) の「車」字は簡 字の中央の縦画が残存すると

が「辨偽(上)」の「(一)形制」において指摘した、
明を与えることは困難である。逆に偽造者が古代の竹簡
簡が真簡であるとすれば、その原因について合理的な説
簡が真にのいて合理的な説
を対して起こり得ず、浙大楚
を対した残簡を用いて書物や文書の書写が行わ

竹簡没有契口・編縄

2、竹簡長短不一。

3、竹簡寬窄不一。

という不可解な諸現象について、整合的な理解が4、章末或節末的竹簡多為短簡。

可

なる。

ではないだろうか。

「はないだろうか。

のはないだろうか。

のはないだろうか。

のはないだろうか。

のはないだろうか。

のはないだろうか。

### 五、字体にかかわる疑点

いる。ただしこれらの分析については、独特の書法用語析を加え、浙大楚簡の書法上の問題を具体的に指摘しておよび「(三) 筆法」において書法的観点から詳細な分および「(三) 筆法」において書法的観点から詳細な分および「(三) 筆法」において書法的観点から詳細な分および「(三) 筆法」において書法的観点から詳細な分および「(三) 筆法」において書法的観点から言細な分がでした。本章では、竹簡の形制にかかわる簡長第三章および第四章では、竹簡の形制にかかわる簡長

対であると考えられる。 対であると考えられる。 対であると考えられる。 対のであると考えられる。 対の形体および簡2の「今」と「命」との誤写を指摘したの形体および簡2の「今」と「命」との誤写を指摘したの形体および簡2の「今」と「命」との誤写を指摘したの形体および簡2の「今」と「命」との誤写を指摘したの形体および簡2の「今」と「命」との誤写を指摘したが用いられていることもあって、書法の専家でなければが用いられていることもあって、書法の専家でなければが用いられていることもあって、書法の専家でなければが用いられていることもあって、書法の専家でなければ

される。

[図7] (注章)。 齟齬の例として、「侯」字および「志」字を取り上げる そこで、以下ではまず浙大楚簡の字体にみえる時代的

る形体は漢代以降でなければ見いだされず、前三四〇年[図I]参照)(#®)、左附1のごとく左側を「イ」に作簡・郭店楚簡・楚帛書などと基本的に合致するが(末尾となっている点である。左附1以外の十八例は包山楚となっている点である。左附1以外の十八例は包山楚となっている点である。左附1以外の十八例は包山楚に外にが不鮮明な左21を除外した十九例を対象とする。こ字跡が不鮮明な左21を除外した十九例を対象とする。こ字跡が不鮮明な左21を除外した十九例を対象とする。こでは「侯」字の用例は『左伝』に二十例あるが、ここでは「侯」字の用例は『左伝』に二十例あるが、ここでは「侯」字の用例は『左伝』に二十例あるが、

同様の現象は「志」字にも認められる。五例の「志」もっても百数十年以上の開きがある。

頃という浙大楚簡の推定年代とは、どんなに早く見積

志

李

左 55

左 60

XX

左 67

4

左113

以降でなければ見いだされず、同様の時代的齟齬が指摘[図Ⅰ]参照)。上部を「土」に作る「志」の形体も漢代は、包山楚簡・郭店楚簡などと基本的に合致する(末尾字の用例のうち左13のみが別体であり、それ以外の四例

# [図7]浙大楚簡の用例「侯」「志」

		侯		
<b>灰</b> 左附 2	<b>東</b>	<b>庆</b> 左93	<b>交</b>	<b>秦</b>
左附 5	<b>庆</b> <sub>左 115</sub>	<b>쨙</b>	<b>反</b>	左39
<b>庆</b> <sub>左附 6</sub>	左 121	<b>庚</b> 左108	左72	<b>凌</b>
<b>庆</b> <sup>左附 6</sup>	<b>反</b>	<b>反</b> 左110	<b>庆</b> <sub>左86</sub>	<b>庆</b> <sub>左49</sub>

ず地域差という面においても重大な齟齬が指摘されるのまり、「侯」左附1や「志」左13には、時代差のみならによって成立したものであり(末尾 [図Ⅰ] A〈秦系文字〉参照)、「図7」に掲げた他の「侯」字や「志」字の字〉参照)、「図7」に掲げた他の「侯」字や「志」字の字〉参照)、「図7」に掲げた他の「侯」字や「志」字の字〉参照)、「図7」に掲げた他の「侯」字や「志」字の字〉参照)、「図7」に掲げた他の「侯」字や「志」字の字〉参照)、「図7」に掲げた他の「侯」字や「志」字の事が、こうした時間的問題と同時に留意すべきは空間的問題こうした時間的問題と同時に留意すべきは空間的問題

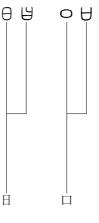
ことを強く示唆するものと言えよう。

〈困難であり、これらの例もまた浙大楚簡が偽簡であるを、言語学的な見地から整合的に説明することはおそらを、言語学的な見地から整合的に説明することはおそらを、言語学のな見地からを合いに説明することはおそらを強く示唆するものと言えよう。

である。

儀礼(祝禱詛盟)と文字との関連を解明することを目的氏の研究は、甲骨・金文の字形をもとに中国古代の宗教の研究によって明らかにされたところである(#3)。白川にもつ系列字の体系が存在することは、白川静氏の一連にもつ系列字の体系が存在することは、白川静氏の一連いて「D」と「D」とが同系に属し、それらを構成要素いて「D」と「D」とが同系に属し、それらを構成要素いて「D」と「P」とが同系に属し、それらを構成要素いて「A」とは字体にかかわる個別的な問題であったが、次に以上は字体にかかわる個別的な問題であったが、次に以上は字体にかかわる個別的な問題であったが、次に

ないところである。 素にもつ系列字の体系が存在する点については、異論の「口」との間に、形体上の明瞭な区別とそれらを構成要「口」とが同系に属し、「D」と「〇」および「凸」とついてはなお異説もある。しかし、少なくとも「D」ととしたものであり、「D」を祭祀祝禱の器とする解釈に



右に簡略に図示したごとく「D」と「〇」および右に簡略に図示したごとが可能となったことである。その詳細についてはあらためて論ずる必要があるる。その詳細についてはあらためて論ずる必要があるる。その詳細についてはあらためて論ずる必要があるが、時代的な変化の過程のみを簡潔に述べれば以下のごが、時代的な変化の過程のみを簡潔に述べれば以下のごが、時代的な変化の過程のみを簡潔に述べれば以下のごが、時代的な変化の過程のみを簡潔に述べれば以下のごが、時代的な変化の過程のみを簡潔に述べれば以下のごが、時代的な変化の過程のみを簡潔に述べれば以下のごとくである。

戦国中期から後期にかけての書写と推定される楚簡で

は両者は明瞭に区別されており、混淆は認められない。は両者は明瞭に区別されており、混淆は認められない。 は両者は明瞭に区別されており、混淆は認められない。 は両者は区別されているが、一部にやや不明瞭な例 が見いだされる。漢代の資料では西漢前期の馬王堆漢墓が見いだされる。漢代の資料では西漢前期の馬王堆漢墓が見いだされる。漢代の資料では西漢前期の馬王堆漢墓の る武威漢簡『儀礼』では両者はほぼ同形となっている。 こうした状況を踏まえれば、「D」と「O」および「D」と「日」との混淆は秦代に萌芽し、西漢後期から東漢前 関にかけて両者の区別は徐々に消滅していったとみてよいであろう。

る。 これを書体史の観点からとらえれば、両者の混淆は漢 これを書体史の観点からとらえれば、両者の混淆は漢 これを書体史の観点からとらえれば、「D」 と「O」および「JD」と「D」の書き分けとそれにもと は形体上の区別も消滅するに至ったとみることができ は形体上の区別も消滅するに至ったとみることができ は形体上の区別も消滅するに至ったとみることができ は形体上の区別も消滅するに至ったとみることができ は形体上の区別も消滅するに至ったとみることができ は形体上の区別も消滅するに至ったとみることができ は形体上の区別も消滅するに至ったとみることが可能となるのであ あるか否かの判別基準とすることが可能となるのであ あるか否かの判別基準とすることが可能となるのであ

体系に齟齬が生じている [図9]。

それではこのような観点から、戦国文字と比較しなが

文字のごとき書き分けは認められない [図8]。 文字のごとき書き分けは認められない [図8]。 文字のごとき書き分けは認められない [図8]。 文字のごとき書き分けは認められない [図Ⅰ]参照)。「史」は「D」の系列字に属し、 になる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」の系列字に属し、 をもち、包山楚簡では同系の「D」に作る例も認めら はる、一方「中」は楕円形の「O」に作り、とくに包山 たる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」の系列字に属し、 を簡や郭店楚簡などの筆記資料では明瞭に書き分けられ ないる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」の系列字に属し、 といる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」の系列字に属し、 をもち、包山楚簡では同系の「D」に作り、とくに包山 なる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」に作ら なる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」の系列字に属し、 でいる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」に作ら ないる。これに対して浙大楚簡の「史」は「D」に作ら ないる。これに対して新大楚簡の「史」は「D」に作ら ないる。これに対して新大楚簡の「となっており、戦国 ないる。これに対しておく

「吏」は十五例すべてが別系の「〇」に作り、系列字の楚簡では「事」は「尹」と同系の「尹」に作るものの、いは「当」に作る(末尾 [図Ⅲ]参照)。ところが浙大いは「当」に作る(末尾 [図Ⅲ]参照)。ところが浙大の用例において、さらに明瞭となる。戦国文字の「事」の用例において、さらに明瞭となる。戦国文字の「事」「吏」

況は戦国文字とも合致する。ても明瞭に区別されている[図10]。そしてこうした状る用例をみると、両者は書き方を異にし、形体面におい続いて「凹」と「口」に移ろう。まず浙大楚簡におけ

ところが「JD」の系列字である「會」「魯」「皆」をみ

ると、 101は「凹」、左11は別系の「口」に作り、さらに「皆」 は九例すべて別系の「日」に作る [図11]。このように 例すべて「当」に作るものの、「魯」は二例のうちの左 に対し(末尾 「凵」の系列字にも顕著な齟齬が認められるのである。 戦国文字はすべて「山」もしくは「廿」に作るの [図Ⅳ]参照)、浙大楚簡では「會」は七

照しつつ書写したことを如実に示すものであり、 字体の体系性を理解しないまま、戦国文字を部分的に参 と「日」とを区別しない書写習慣をもつ書き手が、 けるこれらの顕著な齟齬は、「】」と「O」および 書き分けが明瞭であるにもかかわらず、その系列字にお 簡が偽簡であることを裏付ける明確な証拠と見なされる。 いて混淆が生じることは決してあり得ない。字体面にお て両者の書法上の書き分けが曖昧になったことに起因す 同様の齟齬が認められる 上述のごとく「凹」と「口」との混淆は、 したがって、浙大楚簡のごとく単字における両者の 図 12 。 隷変に伴 浙大楚 0

> 図8 浙大楚簡の用例「史」「中」

中 史 F 罗 左 20 至1正 **►** 16 左 32 季 至1正 左33 更 W/F 至1背 左 44 き 左 117

図9 吏 事 浙大楚簡の用例 3 氨 左116 左33 左32 左6 左1 3 彰 「事」「吏」 左116 左34 左3 左 24 左7 本 夢 3 3 左36 左 56 左 28 左4 左附7 军 季 多 左 57 左 29 左 117 左6

61・左10の三例は「日」、

左附3は別系の「JD」に作り、

作るが、「旬」を構成要素とする「荀」は、 左41・左

[図Ⅴ]参照)、浙大楚簡では「春」は二例とも「⊖」に

戦国文字の用例はすべて「日」に作るのに対し(末尾

一方「日」の系列字である「春」「旬」についても、

[図10] 浙大楚簡の用例「曰」「日」

ļ	Ħ				E	3	I		
3	e	(y)	الح	13	B	B	3	9	<b>W</b> )
左附 11	左16	左114	左106	左 81	左 72	左61	左 45	左 20	左11
至1正	左 54	左 121	左106	左93	左72	左62	左46	左21	左12
<b>5</b>	<b>全</b> 4	左 123	左107	<b>全</b>	左74	左69	左54	<b>设</b> 左28	左16
9	C	4	R	4	y	B	A	3	<b>(4)</b>
<b>\</b> 5	左 65	h 1	左110	左 102	左 79	左 70	左 55	左 43	左 17

荀	春	図 12
方 <b>分</b> 左 41	左1	浙大楚簡の田
左61	左 91	用例「春」「荀
左105		旬」
左附 3		

	皆	
楚	丝	急
<b>卜</b> 14	左 85	左 26
	整	卷
	左113	左 49
	急	き
	左 124	左 53
	巷	45
	左附 4	左81

	會	図   11
左92	左22	浙大楚簡の用
全	左72	例一會」
左100	左91	魯」「皆」
	含 左91	

左101

左111

# 六、『左伝』以外の諸篇の信憑性

る。

### 『卜筮祭禱』

野 - 「月至」 簡1・簡9~簡20〈『左伝』と同筆)

簡2~簡8〈別筆〉

#### 遣策

簡2~簡33〈『左伝』と同筆〉

簡1〈別筆〉

策』を真正な資料として扱うことは困難である。ながら、『左伝』との同筆簡を含む『卜筮祭禱』および『遣ても『左伝』との同筆簡を含む『卜筮祭禱』および『遣ないため十分に見極めがたい部分も残るが、いずれにし存在する。この別筆簡の真偽についてはサンプル数が少存在する。この別筆簡の真偽についてはサンプル数が少存在する。とは異なる別筆と見なされる簡が少数ながら、『左伝』と同じ書写者による簡を中心とし

「庚」「唇」「癸」など)が目立ち、疑問とすべき点が多れた墨を上からなぞった不自然な補筆(例えば「丑」ないて様式上の破綻が甚だしく、『玉勺』簡2正には薄筮祭禱』『遣策』とは書風を異にする。両篇は書法面にび『四日至』簡1正・背は同一人の筆跡で『左伝』『トー方『日書』の『玉勺』簡1正・背、簡2正・背およー方『日書』の『玉勺』簡1正・背、簡2正・背およ

写されたことを示唆する。日至』簡1正・背、簡2正・背の簡首がすべて冒頭の空日至』簡1正・背、簡2正・背の簡首がすべて冒頭の空日至』簡1正・背、簡2正・背の簡首がすべて冒頭の空日で冒頭部分を空白にしており、缺損後の竹簡を用いて書で冒頭部分を空白にしており、缺損後の竹簡を用いて書で冒頭部分を空白にしており、缺損後の竹簡を用いて書のに対しても、『玉勺』簡1背および『四

性は低いと見なさざるを得ないのである。 このように『左伝』以外の諸篇についても、その信憑

### 結語

大楚簡が偽簡であることを明らかにした。稿を結ぶにあ証を加え、併せて字体の観点から若干の補足を試み、浙点のうちとくに重要と見なされる簡長と章法を中心に検以上、本稿では邢文氏が「辨偽」において提起した論

を合い。『「LCと 炭炭目を引って目り)」目音をたり、本稿執筆の動機について言及しておきたい。

でもあると考えるに至った。 字・書法に関する研究を継続してきた者にとっては責務 表明することは無意味ではなく、 の真偽問題について研究者がそれぞれの立場から見解を 争は少なくとも公の場ではなお継続中であり、浙大楚簡 と見なす論考が発表される事態を目の当たりにして、 対する曹錦炎氏の反論が『光明日報』に掲載されて論争 術的にあまり意味がないと感じた。ところが「辨偽」に の上に別の論点から偽簡であることを言い立てても、 簡が偽簡であることはすでに十分に論証されており、こ が、「辨偽」を一読し、この邢氏の論文によって浙大楚 掲載されたことを知ったのはちょうどその頃であった その過程で浙大楚簡の字体に重大な時代的齟齬が存在す の文字を確認していく作業を少しずつ継続していたが、 あった。その後、『左伝』の通行本と対照しながら竹簡 店から入手したのは、五月の連休明け(五月八日)で に発展し、さらにインターネットなどに浙大楚簡を真簡 ることに気づいた。邢文氏の「辨偽」が『光明日報』に 筆者が『浙江大学蔵戦国楚簡』を国内の中国書籍専門 とくに戦国簡牘 の文

上海博物館蔵戦国楚竹書の偽簡説がささやかれ、近いとまた盗掘後に購得された戦国竹簡については、かつて

本稿はこのような意図のもとに執筆された。諸賢のごよう、十分な検証を重ねておくことが必要であろう。こうした状況を考慮すれば、今回の事例が逆にこれらの足間の余地のない資料に対しても疑惑が絶えなかった。疑問の余地のない資料に対しても疑惑が絶えなかった。

#### 注

指正を得ることができれば幸いである。

- (1) 以下、浙大楚簡の釈文の引用は『浙江大学出版社、二〇〇〇年)三経注疏整理本 春秋左伝正義』(北京大学出版社、二〇〇〇年) 「左伝」の通行本の引用は『十二大学蔵戦国楚簡』(浙江大学蔵戦国楚簡) (浙
- および「放大図版」による([図1]~[図6])。(2)以下、浙大楚簡の図版は『浙江大学蔵戦国楚簡』の「図版
- (3) ちなみに『浙江大学蔵戦国楚簡』の「釈文 注釈」に記され(3) ちなみに『玉勺』(二簡) および『四日至』以外の竹簡の個真偽問題解決のためにも、『玉勺』『四日至』(一簡) の簡長のデーている『玉勺』(二簡) および『四日至』(一簡) の簡長のデー

二八・八㎝	『四日至』
三八、五四四	『玉勺』 二号簡
実際の簡長	篇名

- せなかった。 (4)確認のために「放大図版」九七頁の簡11のカラー画像をコ
- また注釈にもこの点に関する言及は見えないようである。には存在するが「図版」二〇頁には見えず、釈文一五五頁でには存在するが「図版」二〇頁には見えず、釈文一五五頁で
- (6)包山二号墓出土竹簡四四八枚のうち、有字簡二七八枚に対して、無字簡が一七○枚を占める(湖北省荊沙鉄路考古隊編『包して、無字簡が一七○枚を占める(湖北省荊沙鉄路考古隊編『包

にも報告されている

- 録「字表」による([図7]~ [図12])。(8)以下、浙大楚簡の字体の用例は『浙江大学蔵戦国楚簡』附の書法の概念や術語を用いた邢氏の分析は適切でないとする。
- Ⅰ]~[図V])。 出版社、二○○一年)により当該字の用例を末尾に掲げた([図出版社、二○○一年)により当該字の用例を末尾に掲げた([図の)以下、比較の便宜上、湯餘恵主編『戦国文字編』(福建人民

[付記] 本稿は、平成二十四年七月十五日に大阪大学で開催された第四十八回中国出土文献研究会における筆者の発表「浙江た第四十八回中国出土文献研究会における筆者の発表「浙江24520466)による研究成果の一部である。

[図Ⅰ] 戦国文字の用例「侯」「志」(『戦国文字編』三三六頁/七○○頁)

〔侯〕 **矦** 志 承 M 点 恭 厗 爷 举 A十鐘 A 秦印 □ 璽彙 0070 В ○ 璽彙 1075 В B曾侯乙尊 郭店・老甲8 包山 213 C中山方壺 A.A. 1 A A 交 璽彙 4334 B 郭店・語叢 1・48 A 青川陶釜 D 十四年陳侯午敦 C中山侯鉞 B 包山 243 A 珍秦 144 B曾侯乙戟 英 衆 庚 丰 6 C四年相邦春平侯劍 A 雲夢・日甲23 反 璽彙 4519 B 九店 56·27 B 郭店・老甲 13 В D 陳侯因資敦 含章鐘 B曾侯乙鼎 参 其 B帛書丙 C 包山 182 B曾侯乙匕 C 貨系 209 E 燕侯載簋 B曾侯乙戈 C中山方壺

[図Ⅱ]戦国文字の用例「史」「中」(『戦国文字編』 一八四頁/二一頁)

							中			史
Ę	电	P		₹	哥	NO.	#	古ヌ	卖	#=
D 陶彙 3·288	D子禾子釜	C	C中山侯鉞	B 郭店・老甲 22	B 郭店・老乙 9	B 貨系 4276	A六年漢中守戈	C 侯馬	B 包山 159	A 陶彙5·384
5	₹	B,	更	重	+	<b>क</b>		103	娱	当
E 璽彙 0368	D 璽彙 0047	/ C陶彙6·17	C 春成侯鍾	B 郭店・老甲 24	B 郭店・語叢 1・21	B 湖南 8	A 十 鐘	C 候馬	B 包山 161	A 故宫 407
<del></del> ₹	र्द	TO TO	f	Ð	丰	革			曹	玄
E 重量 5351	D 陶彙 3·109	C 温 縣	○ 三篇 74	C中山方壺	B 郭店・語叢 3・33	B 包山 138	A 石鼓文·吴人	T T T T T T T T T T T T T T T T T T T	B 重量 1833	B 包山168
E.	6	4	ŧ	1	€	E			亚	卓
E 燕下都 215·6	D 陶彙 3·815	C 侯馬	C 璽彙 2681	C中山王鼎	B郭店・唐虞 16	B 包山 140 反	B鄂君啟車節		肇彙 1903	B 包山138

[図Ⅱ]戦国文字の用例「事」「吏」(『戦国文字編』一八五頁/二頁)



[図Ⅳ] 戦国文字の用例「會」「魯」「皆」(『戦国文字編』 三三二頁/二三二頁/同上)



[図Ⅴ] 戦国文字の用例「春」「旬」(『戦国文字編』三九頁/六一九頁)



旬

19)

A 雲夢・答問7

B王孫遺者鐘

到

B 九店 56·105